

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	■上位目標： エルサレム県において、パレスチナ人青少年のレジリエンスを向上させ、地域住民の健康と福利（Health and Wellbeing）を改善する。 全 19 校で SHC メンバーのレジリエンスが高い水準になり、メンバーの自信や自尊心が高められる。 【指標/アウトプット】 ・ 本事業の開始・終了時に実施するレジリエンス・スケールを用いたテスト1 で、終了時の各校 SHC の平均点が、開始時の全 19 校を合わせて計算した 1 校当たりの平均点を上回る。 ＜テスト結果分析＞ 未達成。本事業の開始・終了時に実施したレジリエンス・スケール（CD-RISC）を使用したテストで、<u>1）終了時の SHCs の平均点が上回ったのは、19 校中 6 校（32%）であった。残り 13 校の平均が大きく平均を下回ってしまった理由は、下記の通りである。</u> (1) <u>やむを得ず途中で対象校が 2 校入れ替わり、新規の学校があったため、それらの学校では事業の効果が出にくかった。</u> 入れ替わった対象校は、(旧) Al Zahra Girls と Aytam Al Thuri Boys だったが、Aytam Al Thuri 校は、イスラエル側の管轄の学校になってしまったため²、対象校から外さざるを得なかった。また、Al Zahra Girls は、学校側があまり協力的でなく、協働が困難であったことから、外すこととなった。³新対象校は Al Rawda Al Haditha Girls, Al Jeel Al Jedid Boys の 2 校。 (2) <u>新型コロナウイルス蔓延の影響で学校が閉鎖となり、電話でのポストテスト実施となったことで回答の質が落ちた。</u> 保健指導員にポストテストのための電話を、保護者の携帯電話を通して生徒一人一人にかけた。しかし、学校が閉鎖されてから時間が経っていたこともあり、家族の多い家にずっと居ること、慣れないリモートスクール、友人に会えないストレス等で、学校に通っていた頃よりも後ろ向きになっている生徒が多く、それが回答に反映されたと思われる。また、電話による質問に慣れていない生徒も多かったとのこと。また、生徒たちの多くは断食明け（日没）の数時間前に起床し、夜間活動し、朝方断食が始まる頃に就寝するという生活をしており、保健指導員が真夜中に電話をしなければならないことも多かった。そのため、回答する際に集中力を欠いていた可能性がある。 (3) <u>分離壁の内側では 11 月より、イスラエル政府の命令により、パレスチナ人の学校は学外での活動が全面禁止となり、小規模プロジェクトの実施と経験交流への参加が叶わなかったため、事業の効果が出にくかった。</u> 分離壁の内側に位置するパレスチナ人のための学校を統括する教育局長が政治的な理由により拘束され、その後 11 月には学外での活動が完全に禁止となった。通常、パレスチナの学校で NGO 等が活動をするためには、教育局の担当者との調整が必要であり、NGO が学校と直接交渉し、勝手にカリキュラムに組み込むことは出来ない。そのため、MRS と教育局が連絡を取れないことで、イニシアティブの実施と経験交流が分離壁のエルサレム側の学校では叶わなかった。

	その結果として、分離壁の外側の学校のポストテストの結果は、9 校中 6 校 (67%) がプレテストの全 19 校の平均点 (目標点) を超えており、最も低いスコアが 69 点 (平均から -9.89 点) であった。また、この 69 点であった Hizma Shuhada School は、プレテストでは上から 5 番目という高いスコアであった。Hizma という地域は活動が活発に行われていた半面、保守的な土地柄であり、COVID-19 の影響による封鎖下において女子生徒の受けている強いストレスが回答に反映された可能性がある。保健指導員からも、「外出規制強化期間中は女子生徒たちのはより外出の許可が得にくく、男子生徒よりも多くストレスを抱えている可能性がある」という指摘があった。 ※ 分離壁の「内側」はエルサレム側、「外側」はヨルダン川西岸側を指す。 ＜質的調査からの分析＞ ポストテストが目標とした結果には届かなかったが、小規模プロジェクトと経験交流ができなかった分離壁の内側と、それらが叶った分離壁の外側の学校のスコアを比較すると、外側の学校の方が、圧倒的にスコアが高かったことから、それらの学校は経験交流で大いに刺激を受け、より良い小規模プロジェクトのために議論が行われ、実施されたのだと考えられる。また、テストの結果だけではなく、モニタリングや保健師からの聞き取り、シンポジウムでの成果を考慮すると、実際には達成できている可能性が高いように見受けられる。
(2) 事業内容	(1) SHC へのトレーニング 本事業の中心である SHC のエンパワメントを行う。 1-1. SHC へのトレーニング SHCs (15 名 × 19 校) が身に着けた知識を応用し、校内や地域でより幅広く自主活動を行う能力を伸ばすため、より実践に重点をおいたトレーニングを実施した。SHCs は校内活動として、各校の他生徒たちに、知識や経験を共有し、校内および地域保健を持続的に向上する仕組みの定着を図った。 1-2. 経験交流 活発な SHC の知見・経験を停滞している SHC に共有し、より広められるよう、SHC 同士の経験交流を実施した。しかし、分離壁の内側に関しては、教育局の閉鎖の影響により活動ができなくなったため、MRS

¹ The Connor-Davidson Resilience Scale (<http://www.connordavidson-resiliencescale.com/about.php>) の CD-RISC 25 を使用する。個人のレジリエンス力を計る 25 問選択式・満点 100 のテストで、本スケール開発時の研究では米国一般人口の平均点が 80.4 とされている (※参考 1)。これまでの事業の成果を受け、2018 年初時点での対象全 SHC メンバーの平均点は 77 (満点 100) で、80 点台後半に到達する SHC がある一方で、60 点台後半の SHC もあり、本事業では平均に達していない SHC のレジリエンス力の底上げを図ることを目的としていた。

(参考 1) Connor KM, Davidson JRT. DEVELOPMENT OF A NEW RESILIENCE SCALE: THE CONNOR-DAVIDSON RESILIENCE SCALE (CD-RISC) Depression and Anxiety 2003; 18: 71-82)

(参考 2) Ameen & Cinkara. The Impact of Language Learning on Internally Displaced and Refugee Resilience. European Journal of Educational Research 2018; 7: 529-538.

² イスラエル政府は、壁の内側のパレスチナ人の学校に対し、イスラエルのカリキュラムを採用すれば補助金を出す、そのままだと取り締まりをする、と壁のエルサレム側の各学校に圧力をかけていた。私立であれば、授業料を上げて IB などの海外のカリキュラムを採用するという逃げ道があるが、お金のないエルサレムのパレスチナ人のための学校は、やむを得ず補助金をもらう道を選ばざるを得なかった学校もあった。(Ayat に聞いてから修正する!) ちなみに MRS はイスラエル側管轄の学校とは協働できないルールとなっている。

³ なお、Al Zahra Girls 校は、現在はイスラエル側管轄の学校になっている。

	と教師の調整により、2校のみ協力を得て、各校から数名のみ聞き取りをするという形で交流を実施した。 (2) 教師および政府職員に対するトレーニング、理解促進 SHCを支える教育関係者のエンパワメントを行う。 2-1. 教師・政府職員へのトレーニング SHCメンバーを学内で支える教師・政府職員たち（それぞれ合計38名、12名）に（1）-1と同様のトレーニングを実施した。教師・政府職員たちは学内で他の教師に対し、トレーニングで学んだ知識や経験を共有するための活動を実施した。研修を受けた教師・政府職員は、生徒向けの研修の際に生徒の理解を促す・サポートする、キャンペーンや自主活動の際には進んで協力・指導しており、特に個々の面談などの実施には至らず、必要時のアドバイスに留まった。JVCは日本から教育開発および事業マネジメントの専門家を派遣し、活動の持続性確保に向けたインプットを行う予定であったが、教育局の閉鎖に伴い、分離壁の内側の学校では活動ができなくなったため、派遣を中止した。 (3) SHCと地域住民による協働 SHCメンバーが地域の理解を深め、保健問題解決のため行動する。 3-1. 地域住民と協働しての小規模プロジェクト実施 SHCが地域住民とともに、公衆衛生上の課題を解決するための「小規模プロジェクト」を企画、そして学校閉鎖直前まで可能な限り実施した。 (4) 地域における持続的なサポート体制の構築 4-1. 地域共同キャンペーンの実施 政治的な理由により、一部の学校では実施できなかったが、16校にて、公衆衛生に関連するテーマで地域を巻き込んだキャンペーンを実施した。 4-2. 協力体制を考える会議の実施 事業の最後に、シンポジウムを開催し、そこに各SHCの活動を支援する教師や住民の代表、教育局職員、そしてMRS職員も参加し、学生たちの活動の成果を共有した。その後、各住民代表とMRSそしてJVCの間で、今後もSHCの活動を支援していくことを表明する証書へのサインセレモニーを実施した。専門家派遣に関しては、対象校（主に分離壁のイスラエル側）と地域の連携を強化するためのコミュニティ作りに対するインプットやワークショップを目的としていたが、2019年10月に分離壁のエルサレム側にあるパレスチナ人のための教育機関を統括するパレスチナ政府の教育局の長が拘束され、11月には6か月間イスラエル政府により教育局は一切の活動を強制的に停止された（6ヶ月以上経っても状況は改善されていない）。それにより、当団体が事業を行っている学校においても、学外での活動がすべて実質上不可能になり、パートナー団体のMRSも教育局の担当者と一切の連絡をとれなくなった。そのため、専門家の派遣は断念した。
(3) 達成された成果	■各活動における成果と指標 (1) SHCへのトレーニング 合計326人のSHC生徒がMRSからトレーニングを受けた。昨年よりも実践に重点をおいたトレーニングが実施された。トピックは「救急救命法」「避難訓練」「学校環境」「健康な食事/栄養」「子どもの保護」「喫煙の害」「コミュニケーション」についてである。 【成果/アウトカム】

SHC が知識をつけることで、学校と地域の公衆衛生問題を特定し、対応策を考えられるようになる。また他の生徒や地域住民に対し、保健や心理社会的トピックに関する知識を広められるようになる。

本事業では、SHC のメンバーの発展的な知識の活用を伺うことが出来た。例えば、「禁煙」に関しては、今まではポスターで啓発活動をするのみだったが、今回は壁新聞を作って科学的な知識など、学んだことをより広く周りに周知し、「コミュニケーション」のトレーニングでは、実際にイニシアティブを地域で始める前に、地域の人たちの意見を引き出す練習をするため、地域に住む SHC メンバーの母親に来てもらい、SHC の練習相手になってもらった事例もあった。SHC 同士の交流に関しては、お互いの小規模プロジェクトに刺激を受け、自分の学校でも実施したいという声が複数聞かれた。生徒によっては、具体的にどういう方法で実施したのかなど高い関心を寄せていた。また、お互いのプレゼンテーションを聞いた生徒たちからは、活動に誇りを持っていてとても自信に満ち溢れているように感じられたという感想が寄せられ、SHC 活動への参加が、確実に生徒たちにとって自信になっていると考えられる。また、生徒たちはキャンペーンという機会以外にも、それぞれが学んだことを家族に共有しているということで、多くの家族も裨益したと考えられ、これは SDGs の目標 3 と 4 に該当する。また、本事業の SHC は女子校 9 校と男子校 10 校と男女がほぼ平等に選定されており、トレーニング内容も男女一緒である。このことから、SDGs の目標 4 と 5 に寄与していると言える。また、トレーニングの中には、「子どもの保護」というトピックがあり、生徒自身はもちろん、トレーニングに同席する SHC 担当教師が子どもの権利について知る機会となり、SDGs16 に寄与するところである。

【指標/アウトプット】

1-1. SHC は、トレーニングで得た知識を踏まえ、学校と地域の公衆衛生問題に対する対応策アイデアを考え、年間 2 つの自主活動が実行される。

分離壁の内側に関しては、教育局の閉鎖の影響により活動ができなくなったこともあり、事業期間内に自主活動を実施することができなかった。分離壁の外側については、学校保健委員が他学年に対して救急法などの講義を行ったり、ポスターや壁新聞を作成して、禁煙、手洗いなどの衛生行動、朝食をとることの重要性などについて啓発活動を実施した。

1-2. (a)経験交流に参加する SHC が、交流先 SHC と CBO や保護者会との繋がりを見た後、同様に地元の CBO や保護者会との会合または訪問を少なくとも 2 回行う。

合計 326 人の SHC 生徒が MRS からトレーニングを受けた。壁の内側の学校は学外での活動が禁止な上、経験交流に参加できなかったため、全体として見ると未達成となってしまうが（地方自治体への訪問は全校平均 1.2 回）、壁の外側の地域では平均 3.8 回の地方自治体への訪問が達成されている。また、Al Sawahreh Girls 校に関しては役所が小規模プロジェクトの実施をマンパワー的にも資金手金も援助した。これは普段からの関係性構築があつての結果である。

(b)経験交流に参加する SHC が、交流先 SHC の校内活動から得た学びを、2 例以上、自校での活動に生かす。

各校でキャンペーンが実施されたが、全体では各校平均 3.9 個、壁の外

側では各校平均 4.4 個のキャンペーンが実施された。これらのアイデアを見ても、各校で「健康習慣」や「植樹・緑化」などの、経験交流で話題にあがっていたトピックが多かった。またイニシアティブのトピックに関しても、以前他の学校で実施されたトピックを、別の学校が少しアレンジした採用するなど、経験交流での学びが活用されている。また、Hizma では女子校が先に実施したプランを男子校が今回採用するなど、地域間での連携も見られた。

(2) 教師および政府職員に対するトレーニング、および教育省・校内での理解促進

【成果/アウトカム】

教師と政府職員が、学校内外で行う SHC の活動に責任をもち、サポートできるようになる。またトレーニングで得た知識や技術を、他教師・同僚に伝えられるようになる。

各 SHC の担当教師や担当の教育局職員は、トレーニング中にトレーナーの補助をする、生徒の発言を促す、SHC の活動に対してアドバイスするなど、責任感を持ち積極的な SHC に関わった。こういった生徒たちの学びや自主活動を大人が支援してくれるということは、青少年の成長にとって大きなアドバンテージになると考えられる、広い意味での質の高い教育 (SDGs 目標 4) に寄与するものであると考える。

【指標/アウトプット】

2-1. トレーニング実施後に行われるアンケートで、SHC 担当教師および政府職員の 8 割以上において、SHC の活動に対する理解度とコミットメントの向上が確認される。

達成。トレーニングを受けた 40 人のうち、トレーニング後のアンケートにおいて、回答のあった 36 人中 17 人がトレーニングは「非常に役立った」、18 人が「役立った」と回答しており、理解度においても、「とても深く理解した」が 14 人、「深く理解した」が 22 人であった。トレーニング後に SHC を支援する意欲が高まったかという質問においても、18 名が「非常に高まった」、18 名が「高まった」と回答しており参加者全員が理解度とコミットメントの向上を見せた。(いずれも 4 段階評価、項目によって無回答有)

2-2. トレーニングを受けた教師および政府職員が学内でセッションを実施し、それぞれ 15 人の同僚に知識や技術を伝達する。

未達成。セッションは全校で実施され、延べ 66 名の教員に知識が伝達されたが、15 人に伝達出来たのは 1 校のみにとどまった。理由としては、学校に関して、教員数が 15 人を下回る学校があることや、カリキュラムの関係上参加できない教員もいたことがあげられる。また、トレーニング時のアンケートでは、トレーニング受講済の教員 6 名からは、教える際、機材がもっと多いと教えやすいという意見があり、4 名が伝達する時間の確保 (カリキュラム上) の難しさがあると回答した。事業開始前に必要となる機材の数は確認していたが、より実践的に技術を確実に伝えていくとなると機材が余分に必要となることが判明した。MRS と相談し、今後の活動では別の資金を確保し、機材確保に努めるよう依頼している。

(3) SHC と地域住民による協働

【成果/アウトカム】

SHC と地域住民が協働して小規模プロジェクトを実施し、地域住民の健康と福利を改善する。

	COVID-19 の蔓延に伴う外出規制、イスラエルの銀行（バンク・ハポアリム）のアラブの銀行に対する規制により、アラブの銀行口座しか持たない学校への送金が遅れ、SHGs がなかなか小規模プロジェクトを開始できない事態があったが、実施した学校に関しては地域住民から「健康と福利が改善された」という声が強く聞かれている。また、分離壁の内側の学校では、昨年 11 月から学校外での活動が政府の命令により一切禁止となったため学内での小規模プロジェクトの実施を余儀なくされたが、ファンドレイズに関しては著しい成果があった。Mar Mitry 校では 1000NIS が学校側から出資され、学校の壁のペイントを行い、Nahda Girls 校では学内で、保護者会の 2000NIS の資金援助を受けてクラスルームの壁の修繕を行った。また、Al Jeer Jedid Girls 校でも、1200NIS を保護者会の支援を受け、皆が使用する校庭の木のベンチの修繕を行った。Banat Al Rawda Al Hadithe 学校においても、500NIS を学校の事務側が出資し、よりよい学習環境のために保温カーペットを設置している。特に壁の内側の旧市街にある学校はイスラエル政府の規制を強く受け、地域からのサポートが得にくいという地理的な特性があるが、こうして保護者会や学校側が生徒の活動を支えるという仕組みが構築されたのは大きな成果であった。プロジェクトを実施できなかった学校でも、トレーニングで得た知識を生徒が持ち帰り、自分の家族に広めていくことで、家族の単位が非常に大きいパレスチナの社会ではより多くの人に広まっていくことが期待できる。これは、そういった教養を得られなかった大人に対しての新たな知識の獲得になると考えられ、また、性別に関係なく活用できることから、SDGs3, 4, 5 に該当すると言える。 <小規模プロジェクト実施状況> 実施完了：10 校 新型コロナウイルスに伴う学校閉鎖で未完了の学校：9 校 （材料は調達済だが、実施途中） 【指標/アウトプット】 3-1. 規模プロジェクト実施後に行われる、各地域の住民代表（5 名×16 地域）を対象とした健康と福利に関するアンケートで、8 割以上の回答者から改善事例が挙げられる。 達成。前述の教育局の閉鎖や送金の問題などにより、小規模プロジェクトが実施されない地域や、進捗が遅れが出ていたことから、実施途中になってしまった地域もあったが、キャンペーン等で地域の人たちと信頼関係を築けていたため、アンケートを実施した。COVID-19 の影響による厳しい外出規制のため、対面ではなく、電話での実施となった。⁴対面ではないこともあり、目標の 5 人×16 地域の人たちから回答を得ることは実現しなかったが、小規模プロジェクトを実施できた分離壁の外側の住民をメインに、21 人から回答を得た。その結果、「情報も有益で、実践的なレクチャーを受けることができた。」「小規模プロジェクトのトピックを決める際は、いつも学校と地域住民の間で協力関係があった。」「小規模プロジェクトの取り組みは健康に有益であり、自分の日常の栄養に対する習慣が変わった。生徒たちの環境に対する態度もベストな方向に改善され、それは目を見張る変化だった。」「クラスメイトが貧血を起こした際、SHC の生徒は早急に応急処置を施していて、それは見事だった。」といった前向きなコ
--	---

⁴ オンラインで顔を見ながらのインタビューも試みたが、諸事情から機能しないということが判明し、電話で行うこととなった。

メントが多く見られた。

（４）地域における持続的なサポート体制の構築

【成果/アウトカム】

コミュニティの垣根を超えてネットワークが構築され、SHC と地域住民の持続的な協力体制が整う。

キャンペーンのテーマが各学校ごととなってしまったため、異なるコミュニティ同士の直接の交流・ネットワーキングには至らなかったが、SHC メンバーたちが他校の生徒と交流し、お互いの地域のことや経験を共有することが出来た。また、それは担当教師も同様であり、他校の取り組みについて地域の議会や保護者会で共有し自分の地域でもいずれ実現できるよう働きかけを行った事例もあった。各 SHC と地域住民に関しては、日ごろの活動へのサポートを含め、保護者会を中心としてキャンペーンへの参加が見られるなど、以前よりもつながりが増えてきていることが感じられた。また、SHCs の市役所への訪問は、各校平均で 1.2 回、地方自治体への訪問も各校平均 3 回あった。特に壁の外側での協力関係は強く、地方自治体への訪問回数は、Al Ram Boys 校で 10 回、Al Jedire Girls 校では 12 回あった。（２）と同様、大人たちの継続的なサポートは生徒が活動をする上で、モチベーションの向上につながると考えられ、広い意味での質の高い教育に寄与すると考えられる。

【指標/アウトプット】

4-1. 各 SHC が SNS 上で地域共同キャンペーンの広報を行い、投稿が 40 回以上拡散され、キャンペーン実施前後でページのフォロワー数が 2 倍以上になる。

達成。各校の facebook ページで地域共同キャンペーンの広報広告も出し、キャンペーンページのフォロワー数は 284 から 650 に増えた（2.3 倍）が、パレスチナでは家庭でも紙コップが多用されており、ゴミ回収などの公共サービスが整わない中、ゴミを増産させている。そのため、自分たちが居住する地域環境への配慮の一環として、繰り返し利用できるアルミのカップを各地域に配るという計画を SHCs 全体で立てていたが、素材そのものの入手が不可能であることが購買の段階で判明し、実施に至らなかった。その代わりとして、地域ごとのキャンペーンを実施した。その際は Facebook ページを拡散することよりも、学校単位でキャンペーンを行う方が保護者への認知度も上がり、多くの支援者が得られるということで、全校生徒を巻き込む形でキャンペーンを実施した。結果的に 16 校（政治的な理由から旧市街の一部の学校では実施できず）で地域を巻き込んだキャンペーンが行われ、一校あたり平均 282 人がキャンペーンに参加した。⁵トピックは健康習慣、環境、禁煙、衛生、栄養、避難訓練、糖尿病、手洗い、緑化、環境整備、などの実践や成果の紹介、ポスター紹介を実施した。

4-2. 16 の地域において、各アクターが SHC と地域が協働で行う活動への事業終了後のコミットメントを表明する。

5 割達成。政治的な理由から壁のエルサレム側の学校の参加は叶わなかったが、事業の終了を目前に控えていた 2 月 4 日に、分離壁の外側の学校を全校招待して、事業のまとめのシンポジウムを実施した。その際、各地域のアクターが今後のコミットメントを約束することが書かれた証書に地

	域の代表が署名をした。分離壁の内側の学校は、訪問する予定だったが、COVID-19 蔓延の影響により各学校への訪問は未だ実現できていない。学校の再開を待って訪問し、保護者委員会のメンバーに署名を依頼する予定である。なお、シンポジウムの様子は当団体・パレスチナ事業のブログで発信している。（英語と日本語） https://www.ngo-jvc.net/jp/projects/palestine-report/2020/02/20200225-symposium.html 当日は教育局の職員、学校の SHC 担当教師など、多くの大人も参加した。また、生徒たちが自由に意見を述べるセッションでは、「学校の壁もそれまでは粗末に扱っていたが、自分たちでペイントするようになってからは、皆が壁に愛着を持ち、大事に扱うようになった」「何かあると学校の事務担当者を常に責めていたが、自分たちで色々やるようになって、（事務側の苦勞も分かり）責めなくなった」など、SHCs の活動に参加し、何事も自分ごとに捉えるようになった様子も伺えた。また、その際に会場からは大人たちが積極的に質問し、SHC の活動への関心の高さと、生徒たちの頑張りへの賞賛、そして生徒たちを全力で支えようとする政府職員・担当教員たちの意欲も感じられた。
（４）持続発展性	【1. SHC メンバーの活動に関して】 SHC のメンバーとしてトレーニングを受けた生徒たちは、MRS の救命救命ボランティアチームに加入するなど、各地域の公衆衛生問題解決のために自主的に活動を継続している。彼らは母校で行われる保健キャンペーンへの協力・出展、サマーキャンプへの補助人員としての参加など、後輩との交流・インプットを積極的に行う傾向にある。また、後続の SHC による活動の質の担保や、地域との連携構築の役割も果たす。2 月に実施したまとめのシンポジウムでは、住民代表として旧市街の対象校・Aytam 校出身の救命救急トレーナーの青年が、「昔は常に誰かの助けを欲していたが、MRS の活動に参加し、もともと否定的なイメージしか持っていなかった『コミュニティ』を自分たちで改善するにつれ、大切さを理解した。また、活動を通して自分自身も成長したいと思えた。今まで多くのことに挑戦し、多くの境界線を越えた。そして、やっと自分の人生はこれでいいと思えた」という力強いスピーチを行った。困難の多い社会で、ロールモデルとなる先輩たちからの励ましやポジティブな言葉を日常的に聞くことにより、一層地域のために、そして自分の成長のために活動を継続したいと思う SHC のメンバーは少なくない。また、分離壁の内側にある MRS の事務所では SHC のメンバーが MRS のボランティア青年たちと交流を持ち、また、元 SHC の青年たちは、新型コロナウイルスが蔓延した際も、トレーニングで得た衛生の知識を生かして、最前線で衛生キットの配布等を行っていた。 【2. 地域活動の活性化】 前年までの事業の成果として、SHC が小規模プロジェクト実施の際に自らファンドレイジングを行い、保護者や地域住民が寄付で貢献した例がみられたが、この姿勢は多くの学校で見られた。今回の経験交流の実施でさらに、このような事例とノウハウが他校・他地域に広がり、刺激を受けた SHCs が自分たちの地域でファンドレイジングおよび問題解決の文化を定着・強化できると期待する。COVID-19 の蔓延により、学校が閉鎖となり、イニシアティブの実施を最後まで見届けることが叶わなかったが、再開後に実施されるイニシアティブの効果を引き続き確認する。 【3. パートナー団体の活動活性化】

	本事業では各地域での進捗確認と活動定着のため、モニタリングや JVC・MRS 間の意見交換をこれまでの事業より頻繁に行う予定であったが、JVC 側の人員体制が整わなかったこともあり、予定したほど意見交換の時間を持つことはできなかった。しかし、話し合いをする中で、新たな情報共有の方法の導入や、予定になかったシンポジウム開催の提案が出るなど、MRS だけではなく、JVC にとっても新しい学びがあった。JVC との活動経験が今後の MRS の活動に生かされることを期待する。 【4. 教育政策による地域保健向上活動の推進】 対象校を管轄している教育省エルサレム教育局およびエルサレム郊外教育局の学校保健課長が昨年から本事業の活動に関心を示しており、分離壁の外側の対象校以外で特に困難な環境にある学校（Beit Duqqa, Beit Anan など 5 校）においても、2020 年から SHC が地域住民とともに公衆衛生上の課題を解決する「小規模プロジェクト」の導入が決定された。昨年、本事業で実施した、各校がイニシアティブの質を競う「表彰式」にもトライアルでこれらの学校が参加していたが、質の良いコミュニティ活動を実施した様子が確認されていた。なお、学校を巻き込む地域での活動にはすべて教育局の許可が必要であり、許可は教育局が出したが、資金援助は行わないとのこと。本事業でも、各校 1000 シェケルの出資のみとしたのは地域の力での持続的な活動を期待してのことであった。資金が不足しているからやらないのではなく、自分たちが必要と思ったことを実現するために SHC が自分たちで資金集めをし、地域の人たちの協力を得て大きな成果を出してきたため、これらの 5 校でも同様にプロジェクトが発展していくことが期待される。また、前述の学校保健課長の他にも、普段直接学校を担当している職員なども積極的に SHC の活動に関心を持ってサポートしてくれており、今後も本事業対象校 19 校をはじめとして、多くの学校でこの活動が継続していくことが期待される。 【5. 他団体・ドナーへの活動共有】 本事業終了後も活動を実施する体制が持続するよう、活動 4.「地域における持続的なサポート体制の構築」において行うネットワーク活動に加えて、MRS の医師がスイスへ出張し、SHCs の取り組みを紹介した。（Medico Switzerland の招待にて）また、当団体も日本国内での紹介として各講演会での事業の紹介、そして当団体・パレスチナ事業の facebook や「現地だより」としてブログ記事で活動を掲載していたが、今年度から記事の翻訳がなされ、海外に向けた発信も行った。
--	--